

南宋国における道元禅師
いまここに

脚本 戸張道也

道元 『典座教訓』 他より

南宋国における道元禅師 いまここに

脚本 戸張道也

道元 『典座教訓』 他より



* 目 次 *

― 第一場 ― 「典座教訓」より …………… 5

― 第二場 ― 「宝慶記」より …………… 13

(参問) …………… 13

(古貌贊嘆) …………… 14

(因果) …………… 14

(身心脱落) …………… 15

(感応道文) …………… 15

(五蓋六蓋を除く秘術) …………… 16

(柔軟心) …………… 16

(風鈴の頌) …………… 17

(識語)	18
― 第三場 ― 「典座教訓」より	20
参考書	24
読書余滴 須田剋太画伯の色紙と修証義	25
索引	27
コマーションナル	29



次頁へ



前頁へ

南宋国、慶元港にて

潮騒の音

背景に慶元の町と山並

倭船の中

加藤四郎左衛門景正（道元従者 尾張国瀬戸の住人）踊り歌う

遊びをせんとや生まれけむ

戯れせんとや生まれけん

遊ぶ子どもの声きけば

わが身さへこそゆるがるれ

・
・
・

舞へ舞へ 蝸牛

舞はぬものならば

馬の子や牛の子に蹴させてけん

踏み破らせてん

まことに美しく舞うたらば

華の園まで遊ばせん

・
・
・

われを頼めて来ぬ男

角三つ生ひたる鬼になれ

さて 人に疎まれよ

霜 雪 霰 降る水田の鳥となれ

さて 足冷たかれ

池の浮草となりねかし

と揺り かう揺り 揺られ歩け

もう一人の従者 さて景正殿、戯れ歌を…。

加藤四郎左衛門景正 これは、いまはやりの今様でござる。私も宋

国の陶芸の巧みを学び郷里瀬戸の地に、創業しようとして励んでいるところですが、ついこの暑さに浮かれて。

加藤四郎左衛門景正、宋国の壺をもって来る。

下手より、六十才ばかりの宋の老僧がやってくる。

典座（阿育王山天童寺典座） 頼みます。

もう一人の従者 これは、どなた様ですか。

典座 私は、阿育王山天童寺の典座です。倭船が椎茸を積んで慶元の港に着いたと知り、僧堂で振舞う麵汁にしたいと思いきや、ぎ買いに参りました。

もう一人の従者 それはそれは。しばらくお待ちを。

船長 これに椎茸を一かご持ってきました。代金は宋銭十両でございます。

典座 では代金をお受け取り下さい。

船長 一二三、四五六、七。今何時だ。九、十。やや一両多いぞ。

もう一人の従者 船長、それは、買い手のやり口だ。

船長 そうか仕舞った。ありがとうございました。

船長去る。

道元（入宋時二十四才）現れ、典座に話しかける。

道元 私は日本国より、佛道参学のため参りました道元と申すもの

です。どうぞこちらでお茶でも一服いかがですか。

もう一人の従者お茶を持参する。

典座 これは忝ない。頂きます。

道元 貴僧はどちらからお出でですか。

典座 私は、阿育王山天童寺の典座でございます。郷里、西蜀を離

れて四十年、六十一才になりました。諸方の僧堂を巡りま
したが、先年孤雲道濠師のもとにおりました。育王山を尋

ねた折りより、天童寺を住居とし仏道修行の日々を過ごし
て参りました。いま**典座**の職に就いております。明日、五
月五日にあたり、麵汁を作り僧衆に供養したいと思いまし
たが、よい具がありません。この船に椎茸があることを知
り、早速買いに参りました。

道元
それは、それは。阿育王山を何時立たれたのですか。ここま
で何里の道程ですか。

典座
道元
朝食のすぐ後出立しました。三十四五里ほどの道程です。
何時お帰りになられるのですか。

典座
只今、椎茸を買うことが出来ましたので、直ぐ帰りたいと思
います。

道元
思いもかけず貴僧にお会いでき、うれしく思います。折角の
好い機会です。今宵はこの**道元**が貴僧を供養したいと存じ
ます。是非仏道や祖師の語録など、懇ろにお話を伺いた
いと存じますが。

典座
いや、誠に忝ないことですが、急ぎ僧堂に立ち戻り、明日の

食事を整えねばなりません。

道元

食事の世話など、貴僧がなさらなくても、代わりがおられるでしょう。佛道のためにさほどのことも覚えませんが。

典座

私は老年になって、この典座の職に充てられました。老いばれの大切な修行弁道です。どうして他人に譲ることができませんようか。また、こちらに参るにあたり宿泊の許可も得ておりません。

道元

典座殿。どうして座禅をしたり、祖師方の話頭を学ばないで、煩わしい典座の職など、雑事に専念しようとなさるのですか。

なにか好いことでもあるのでしょうか。

典座

はははは！外国の好き若き僧よ。あなたはまだ仏道のなんたるかを学んでおられぬようだ。文字や学問が仏道修行ではありませんよ。

道元

文字とは何でしょうか。弁道とは何でしょうか。

老典座

その問いに答えられなくて、どうして仏道修行の人と言えま

しよう。

道元

—無言—

典座　　いまだお分かりなければ、他日阿育王山天童寺にお尋ね下さい。共に文字弁道の道理を語り合いましよう。ああもう日が暮れそうだ。では、さらばです。

典座、椎茸のかごを担いで去る。

道元、見送る。

— 第一場おわり —

— 注 —

(注一) 典座教訓

道元が宋国の風に習い、永平寺における食事を掌る典座のための規則を作った。簡潔で配慮に富んだ言葉に満ちている。

(注二) 道元

永平寺開祖 正法眼藏九十五卷、永平広録等を著す。日本思想史上の巨人とも称される。久我通具（大納言）を父とし京都に生まれる。深信因果（仏教の縁起説）にもとづき一切衆生を度さんとする「大悲」を先とする「誓度一切衆生之坐禅」、「自未得度先度他」を説く。

(注三) 典座

僧堂の食事を掌る

(注四) 南宋

中国は当時北方民族に圧せられ、北宋から南宋と言われる

(注五) 時代

北条氏鎌倉時代

(注六) 今様三首

「梁塵秘抄」より（平安末期女芸人たちによって広められた歌謡を集めたもの。後白河院撰）

如浄和尚と道元禅師との対話

阿育王山天童寺如浄和尚の方丈にて
静寂、堂にみつる。

(参問)

道元 和尚様、外国遠方の若輩である私が、時候に拘わらず、威儀を具せず度々方丈に伺い、拝問したいと存じます。無常は迅速にして生死は大事であります。時は人を待ちません。貴方様のもとを去れば必ず後悔するでしょう。どうか道元が佛法を問うことをお許しく下さい。

如浄 君の参問を許す。今より後、昼夜時候に拘わらず、服装にかまわず我が方丈に來り道を問うてよい。父親が子の無礼を許すようにしよう。

(古貌贊嘆)

如淨 君は年小だけれども、すこぶる古仏の風貌がある。すみやかに深山幽谷に居住して佛祖となるべき身体を大切にし修行しなさい。必ず古徳の証した結果を得るであろう。

道元 — 足下に礼拝する —

如淨 — 「能礼所礼性空寂、感応道交難思議」と唱え、広く西天東地の佛祖の修行生活を説かれた —

道元 — 感涙襟潤 —

(因果)

道元 因果というものは必ずあると感得すべきでしょうか。

如淨 原因と結果（仏道の修行と証果）を感得すべきである。

なにも存在しないと言う「空」の理解は因果を否定するものであり、修行をおろそかにし、災いを招く。仏道の人ではない。

(身心脱落)

如淨 参禅は身心脱落なり。焼香・礼拝・念仏・修懺・看経を用いず。祇管に打坐するだけである。

道元 身心脱落とはどういうことでしょうか。

如淨 身心脱落とは坐禅である。祇管に坐禅する時、五欲を離れ、五蓋を除くのである。

(感応道交)

道元 和尚が説かれている「能礼所礼性空寂、感応道交難思議」と言う言葉は深い意味のあることと存じます。どのように解釈したら良いのでしょうか。

如淨 君は感応道交の意味を知らなければならぬ。もし感応道交がなければ、諸仏もこの世に出現せず、達磨大師もインドから西来しない。礼拝する者と礼拝される者、衆生と仏とは必ず感応道交である。

(五蓋六蓋を除く秘術)

道元

和尚の大慈大悲を蒙り、未だかつて聞かないところを教えてくださいいただきました。五蓋六蓋（食欲・ねたみいかり・睡眠・悔やみ・疑い・無明）を除くのに秘術があるでしょうか。

如浄

—和尚微笑して言われるには—
君はこれまでの工夫弁道でなにをしてきたか。六蓋をはなれる法であろう。祇管打坐して功夫し、身心脱落することこそが秘術であり、この外に、一切別事はない。まったく一個の秘術もない。

(柔軟心)

如浄

いわゆる佛祖の坐禅は、初発心より一切諸仏の法を集めんとを願う。坐禅の中において、衆生を忘れず、衆生を捨てず、ないし、昆虫にまでも、常に慈念を拾いて、誓って済度せんことを願い、あらゆる功德を一切に廻向するなり。世々に諸々の功德を修して、心の柔軟なることを得るなり。

道元

どのようにしたら、心の柔軟なることを得るのでしょうか。

如浄

佛々、祖々の身心脱落を弁え肯定するのが、すなわち柔軟心である。これと呼んで佛祖の心印とする。

道元

—礼拝する—

(風鈴の頌)

渾身似口掛虚空 不問東西南北風

一等為他談般若 滴丁東了滴丁東

道元

和尚の風鈴の頌を承るに「渾身口に似て虚空に掛かる」とあります。いわゆる虚空とは、虚空色を言うのでしょうか。

如浄

虚空とは般若（佛法の根本原理としてさとりの心）である。虚空色（青空というかたち）ではない。

道元

和尚の風鈴の頌は、最高のなかの最上です。幸いに、私はこれを聞くことができます。歓喜し、感涙衣を湿し、昼夜にこれを頂いております。端直で曲調があります。

如浄

—和尚まさに駕籠に乗らんとするとき、笑みをふくんで—
君が言ったこと、深うして抜群の気宇がある。未だ嘗てこのように解釈してくれた者はいない。我れ、天童老僧、君の眼識を許す。

天童如浄和尚去る

* * *

一二二五年五月一日、道元禪師は天童山如浄和尚に相見参禅、天童山にとどまり、一二二七年、如浄和尚の嗣書を受けて日本に帰国したのである。

— 第二場おわり —

(識語)

一二五三年十二月十日、越州吉祥山永平寺の方丈にて、これを書写する。右は先師永平道元古佛の御遺書のなかにあったもの。これを

草し始め給い、なお余残があるであろうか。恨むらくは、完全を期し得ないことである。悲涙千万端と流れる。

懐奘

―注―

(注一) 宝慶記

道元が宋国の宝慶年間(一二二五―一二二七)に天童山の如浄との問答を記録したもの。道元没後永平寺方丈の遺書から発見され懐奘により浄書された。

(注二) 如浄

天童山景德寺(中国浙江省、太白山下、晋の恵帝三〇四年に開山)の住持。すべての名利を超越した修行坐禅を実行した南宋末期の禅僧。一二二七年道元禅師に法統を伝えたのちまもなく没した。

(注三) 懐奘(一一九八―一二八〇)

一二三四年、深草の興聖寺に道元禅師をたずね入門した。
一二五三年、道元禅師が没するまで二十数年師に仕えた。
永平三祖。「正法眼蔵随聞記」「宝慶記」を編集した。

越前国永平寺僧堂

松籟の音

背景 越前の山と谷

僧堂にて、正法眼蔵を著述する道元（晩年）南宋における若き日を回想する。

朗読 道元回想

私が宋国天童寺に在りし時、用典座が職に当っておられた。食事の後、東廊下を過ぎ院に向かう途中、用典座は仏殿の前で、海のりを晒していた。笠もかぶらず、竹杖を携え炎天の下、地は熱し、汗が流れ落ちていたが、力を励まして、晒していた。大変辛そうであ

った。背骨は弓のように曲がり、鶴のように痩せていた。私は、典座の御年を尋ねた。用典座いわく六十八才と。私は言った。どうして使用人を使わないのですか。用典座は言った。「他はこれ吾にあらず。」と。私は言った。「御老体を労わらなければ。太陽がこんなに照りつけています。どうしてお休みにならないのですか。」用典座は言った。「さらにいずれの時をか待たん。」と。

私は一言も発することができなかつた。廊下を歩みながら、用典座の至言なることを悟つた。

又、阿育王山天童寺に修行した折、かの慶元港の船中で会つた老典座が尋ねてきた。いま典座の職を退き故郷に帰るところです。是非お会いしてお話をしたいとのこと。私は喜び感激して、老典座と語りあつた。先日の上での文字弁道の因縁を語つた。老典座いわく「文字を学ぶ者は、文字の故を知らんと為す。弁道を務むる者は、弁道の故を肯わんと要す。」私は問うた。「如何にあらんかこれ文字。」老典座「一二三四五。」また問う。「如何にあらんかこれ弁道。」老典座「偏界曾つて蔵さず。(この世界になにも隠されたものは無い。

眼前に真理が満ちている。」私がいささか文字を知り、弁道を理解出来たのは、かの老典座の大恩によるものであった。

吟詠五首

道元禅師和歌集

題法華經

溪に響き 峯に鳴猿妙妙に 只此經を 説くところそ聞け

宝治元丁未年、在鎌倉西明寺殿北御方道歌を御所望の時
荒磯の 浪もえよせぬ高岩に かきもつくべき 法ならばこそ

建長五年八月初五日、開山御上洛ノ其日御頌・歌在之

草の葉に かどでせる身の 木部山 そらにをかある
心ちこそすれ

御入滅之年八月十五日夜、御詠歌に云

又見んと 思ひし時の 秋だにも こよいの月に ねられやはす
る

詠本来面目

春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪きえで すぐしかりけり

永平広録第九風鈴頌

渾身これ口 虚空を判ず

居起す 東西南北の風

一等に玲瓏として 己語を談ず

滴丁東了 滴丁東

—了—

参考書

- 一、『原文対照現代語訳道元禅師全集第十六卷宝慶記・正法眼蔵随聞記』
(春秋社)
- 二、『道元禅師全集第六卷(典座教訓ほか)』(春秋社)
- 三、『正法眼蔵を読む人のために』水野弥穂子(大法輪閣)
- 四、『道元辞書』菅沼 晃(東京堂出版)
- 五、『正法眼蔵を読む』寺田 透(法蔵館)
- 六、『続正法眼蔵を読む』寺田 透(法蔵館)
- 七、『道元思想論』松本史朗(大蔵出版)
- 八、『正法眼蔵随聞記の世界』水野弥穂子(大蔵出版)

須田剋太画伯の色紙と修証義



私の所持する須田剋太画伯の色紙「河童天国」に修証義よりと記入されています。その修証義とは明治二十三年に編集されたもので、曹洞宗の開祖道元祖師の著書「正法眼蔵」の内容を解りやすくしたもので曹洞宗で重用されるものだそうです。全五章三十一節三七〇四文字で構成されています。

修証義の第一章 総序 三行目に「人身得ること難し、仏法値うこと希れなり」とあります。

須田剋太画伯の色紙には「人身得ルコト難ク万法値ヒ難シ」と記されています。この世に人身として生まれることができなかつた河童達がものを食べようとしたり、カラオケで歌ったりし、それを鰐たちがうらやましそうに眺めている様が画かれています。

「この世に人間として生を受けることは、極めて希なことである。またこの世で真理を感得し、さまざま人間・動物・植物・自然に出会う機会を持つことも人知を超えて貴重なことである。」という意味とします。

索引

ページ番号をクリックするとそのページにジャンプします

ア行

因果 12、14

永平広録 12、23

永平寺 11、12、18、
19、20

カ行

懐奘 19

感応道交 14、15

工夫弁道 16

五蓋六蓋 16

虚空 17、23

古貌贊嘆 14

サ行

参問 13

修証義 25、26

柔軟心 16、17

如浄 13、14、15、16、
17、18、19

正法眼蔵 12、19、20、
24、26

身心脱落 15、16、17

須田剋太 25、26

曹洞宗 26

タ行

典座 5、7、8、9、10、11、
12、20、21、22、24

典座教訓 5、11、20、24

道元 5、8、9、10、11、
12、13、14、15、16、17、
18、19、20、22、24、26

ナ行

南宋 5、12、19、20

ハ行

般若 17

仏法 26

宝慶記 13、19、24

マ行

文字弁道 11、21

ラ行

梁塵秘抄 12



次頁へ



前頁へ

目次に戻る

こすもす文庫 ③

南宋国における道元禅師 いまここに

2004年 3月19日 第1刷発行

2004年 5月23日 第2刷発行

*

著者 戸張道也

*

発行者 戸張道也

*

発行所 戸張会計事務所

〒213-0002 川崎市高津区二子 5-1-15

電話 044-833-4361 (代)

FAX 044-844-6035

ホームページ URL: www.tobari-kaikei.com

キーワード検索: 戸張会計・tobari-kaikei・

とばりかいけい・トバリカイケイ

*

編集・制作 有限会社田園都市出版

電話 042-780-2405



目次に戻る

戸張 公認会計士 事務所 税 理 士

税務・経営・監査

こすもす簿記システム(当社開発自計用簿記)導入指導

〒213-0002 川崎市高津区二子5-1-15 高津駅3分

TEL 044-833-4361(代) FAX 044-844-6035

HPアドレス(URL) : www.tobari-kaikai.com

こすもす教室

パソコン、生花、茶道、料理、英会話教室などにご利用いただけます。午前、午後、夜、曜日別月契約となります。

所在地：川崎市高津区二子5-1-15 高津駅3分

お申し込みは戸張会計事務所：電話 044-833-4361

こすもすホール(貸ホール)

www.cosmos-shop.com/hall1/

ダンス、バレエ、リトミック、気功、ピアノ、カラオケ、コーラス、パソコン教室、簿記教室、料理教室などにご利用いただけます。

午前、午後、夜、曜日別月契約となります。

ひさもと：川崎市高津区久本2-2-1 洗足学園手前

さかど：川崎市高津区坂戸1-6-9 イトーヨーカ堂先

お申し込みは戸張会計事務所：電話 044-833-4361

スパゲッティとドリアの店 ファーム

川崎市高津区久本2-2-1

洗足学園手前交差点角

TEL 044-865-8118

各種パーティ、ご宴会のご予約を承ります。



次頁へ



前頁へ

目次に戻る

